

特別企画

ケータイで子ども人間関係が変わった①

「異界」と常時接続する子どもたち

佛教大学教授 富田英典

映画『ボイス』——呪われた携帯電話

現代人の必携メディアとなったケータイは、さまざまな社会問題を引き起こしてきた。本稿では、そんなケータイ社会の行方と子どもたちに与える影響について考えてみたい。

ジウオンの新しい携帯番号は、『011-9998-6644』。

電話会社のコンピュータ画面に、なぜかこの番号しか表示されなかったのだ。ある日、まだ誰も知らないはずのジウオンの携帯が鳴った。側にいたヨンジュが電話に出ると、彼女の様子が豹変する。恐怖に目を見開

き、全身を痙攣させて絶叫するヨンジュの手から携帯をもぎとったジウオンは、受話器からかすかに聞こえる不気味なノイズに戦慄する。

(『ボイス』オフィシャル・ホームページ(1)より)

韓国映画『ボイス (The Phone)』(配給元、ブエナ・ビスタ・インターナショナル・ジャパン)は、二〇〇二年夏に韓国で公開され、『スター・ウォーズ エピソード2』をしのぐ二五〇万人の観客を動員し、ホラー・ムビーの中で韓国史上最高の興行収入を記録した大ヒット作品である。わが国でも今年の四月二六日より公開されたが、公開に先立って同月一日からオン・エアされ

たCMは、あまりの怖さにその内容が変更された。この作品の怖さはいったどこからくるのだろうか。まず、この点から考えてみることにしよう。

ケータイ的常時接続

今日の情報通信社会を支えるインターネットとケータイであるが、インターネットはブロードバンドと常時接続の普及により私たちの生活に浸透しはじめている。それに対して、ケータイはインターネットの普及以前から「いつでも」利用でき連絡がとれるという意味での常時接続を可能にしていた。

ケータイを持っている限り、私たちは常にオンラインの状態なのである。映画『ボイス』では、呪われたケータイが登場し、そのケータイにかかってきた電話の声を聞いた少女が亡霊に取り憑かれる。呪われたケータイの恐怖は、怨念の世界と常時接続されていることから生まれるのである。ケータイは、従来の固定電話に比べて常時携帯しておりダイレクトに相手につながるため「直接性」が強い。しかも、耳にケータイを当てて声を聞くと、この行為は、怨念がまるで体内に侵入するような錯覚を覚えるのである。

異界と接続するケータイ

新幹線やJR、私鉄各社では、電車内でのケータイの使用を禁止するアナウンスが流れる。その中には、ケータイの電源を切ることを乗客に要請する車両を導入している私鉄もある。他の乗客の迷惑になるとするのがその理由である。しかし、車内でケータイで話している人はまだいる。その場にはいない誰かと話している姿を見ると、周囲の乗客は不快になる。それは、その人がまるで亡霊に取り憑かれたヨンジュと同じように見えているからかもしれない。

以前「プチ家出」が話題になったことがある。それは、本格的な家出ではなく、ケータイで連絡を取り合いながら友だちの家を転々とする短期間の家出である。両親は、ケータイに電話をかけるが子どもたちは応答しない。子どもが持っているケータイを鳴らすことはできるが、連絡もとれずどこにいるのかもわからない。そして、子どもたちは、お金がなくなったところにふと戻ってくる。そんな「プチ家出」で利用されるケータイも、別の世界への入り口になっているように思える。

出会い系サイト

今日の情報通信革命を支えるインターネットとケータイであるが、両者はパソコン通信と自動車電話というまったく異なる出自を持つ。そんなインターネットとケータイは、今では完全にリンクしている。それは、ドコモのiモードの成功によってたらされた。その成功は世界的な注目を集めた。そして、わが国では、すべてのケータイからインターネットが利用可能となったのである。ケータイの特性を生かしたインターネット上のサービスが多数登場しており、その可能性は計り知れない。パソコンからのインターネット利用とケータイがリンクした世界を視野に入れてこそケータイの現状とそれが社会や子どもたちに与える影響が見えてくる。

そんなケータイをめぐる社会問題としてクローズアップされたのが出会い系サイトであった。これらの多くは有料サイトであり、見知らぬ異性と知り合うことができるサービスである。このサイトが問題にされているのは、それが売春や犯罪・非行の温床となると見なされているからである。ただ、ケータイと平行してわが国で急速に普及したパソコンからのインターネット利用でも、

出会い系サイトが多数存在している。AOL、MSN、YAHOOの三大ポータルサイトには、無料の出会い系チャットルームがあり、多数の人々が利用しているのである。

若者たちの間では、ケータイによるEメールは、友人間で交換される場合がほとんどであった。その理由は、お互いにメールアドレスを交換している必要があるからである。ところが、出会い系サイトの登場により、見知らぬ者同士がケータイでEメールの交換を行うようになった。ここでは、匿名のまま親密な関係が成立している。それは、「匿名であるから親密になれる」という関係である。

インティメイト・ストレンジャー

本来、匿名性と親密性は相容れないものであった。ところが、匿名だから親密になれるという状況が出現しているのである。そのような現象を「インティメイト・ストレンジャー（親密な見知らぬ人）」現象⁽²⁾と呼んでおこう。

親や教師が一番恐れているのは、子どもたちがインターネットで知り合った「インティメイト・ストレンジャー

「との関係がケータイ・インターネットへと移行することである。パソコンを利用したメールの交換やチャットだけで終わっているなら、一定の匿名性が保たれているために、危険な関係に巻き込まれても関係をいつでも解消することができる。しかし、親しくなるとお互いのケータイ番号やケータイ・メールのアドレスを交換するようになる。そうなると実際に二人が会う可能性が高まる。ただ、子どもたちの場合は、最初からケータイでインターネットを利用し、見知らぬ人と知り合う場合が多い。そのために実際に会う可能性は高いと考えられる。

ただ、「インティメイト・ストレンジャー」現象は、子どもたちの間だけに生まれているものではない。たとえば、平成一一年版の『通信白書』（郵政省）⁽³⁾によれば、「ネット上で知り合った人がいる」と回答している者は、若者（一八歳から二五歳）で六一・九%、シニア（五〇歳以上）で三七・三%、専業主婦で五一・八%である（表1）。しかも、「ネット上で知り合った人とオフラインで会った」と回答したものは、若者で三二・八%、シニアで一四・七%、専業主婦で一四・八%となる。その後のインターネットの普及を考えると、これらの割合はさらに増加していると予想される（図1）⁽⁴⁾。

つまり、世代を超えてインターネットが出会いの場として利用され、新しい人間関係が形成され始めているのである。

友人の登録と削除

少年少女のケータイのメモリには、たくさんの友人や知人の電話番号やメールアドレスが登録されている。その中には、今ではほとんど連絡をしない友人も含まれている。しかし、関係が切れてしまったわけではない。ケータイのアドレス帳の名前をクリックすればいつでも連絡がとれる。ただし、それは逆に言えば、そのアドレスをケータイから消去してしまえばもう連絡をとることはなくなり、友人との関係は「切れる」のである。

これまで、友人との関係は、「親密な関係」と「疎遠な関係」という尺度にもとづいて表現されてきた。恋愛関係の場合は、関係が完全に「切れる」ということはあったが、友人関係の場合は、限りなく疎遠になることはあっても、関係が「切れる」ことはなかった。もしも友人との関係を「切る」場合は、「絶交する」という手続きを必要とした。

ところが、ケータイのメモリに友人リストが登録され

(単位: %)

活動内容	全体平均	若者 (18~25歳)	シニア (50歳以上)	専業主婦
メールフレンドがいる	65.0	74.6	53.9	76.3
ネット上で知り合った人がいる	50.0	61.9	37.3	51.8
ネット上で知り合った人とオフラインで会った	23.3	32.8	14.7	14.8

表1 ネット上の交流活動

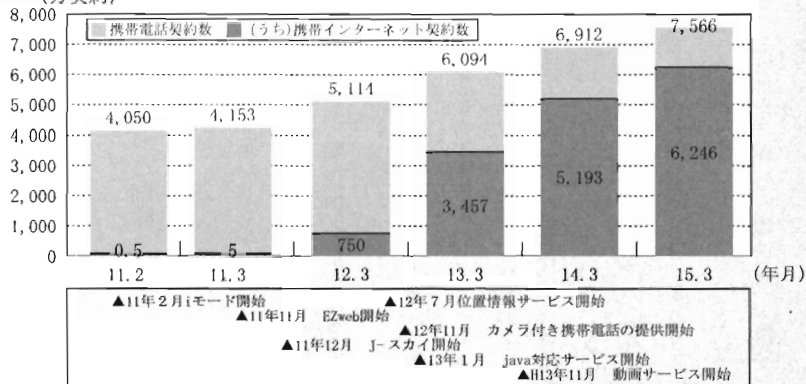
(出典) 郵政省『平成11年版 通信白書』2002

『マトリックス』の中のケータイ

映画『マトリックス リローデッド』(配給元、ワーナー)が日本でも今年公開された。この作品の斬新さは、私たちが生きているこの世界が実はコンピュータに

ある。のようになり始める。そこに登録したり削除したりすることにより、友人関係がつながったり切れたりする現象が出現しているのである。つまり、現実の人間関係もまるで「インターネット・ストレンジジャー」と同じようにメディアの中の関係となり始めているのである。

(万契約)



※ 携帯インターネット契約数は、携帯電話事業者によるiモード、EZweb (IHEZaccessを含む)、J-Skyのサービス契約数合計

図1 ケータイ・インターネットの普及

(出典) 総務省『平成15年版 情報通信白書』2003

支配された仮想現実の世界であり、人々はそれに気づかずに生活しているという設定にある。それに気がついた主人公の「ネオ」たちは、マトリックスと現実世界のふたつの世界をコンピュータに接続された電話回線を利用して移動する。そして、このふたつの世界を結ぶ交信手段がケータイだった。「ネオ」たちは、ケータイを手に現実世界とつながった電話回線を探して走り回る。

実は、子どもたちも映画の中の「ネオ」と同じように、仲間のいるもうひとつの世界とつながった地点を探して街を移動している。ケータイが社会に与えるインパクトは、生活が便利になったとか、新たな犯罪や非行が生まれるというレベルのものではない。それは、インターネットとリンクされることにより、親も友だちも知らないもうひとつの世界と常時接続された環境を作り出す。そこから溢れ出すのは、「インティメイト・ストレンジャー」との新しい人間関係である。そして、子どもたちは、これまでの親子関係や家族関係、友人関係などの日常生活そのものに疑問を抱き始める。そうなったとき、親や友人の言葉はもう子どもたちには届かない。

私たちに残されているのは、従来の家族関係や友人関係を見つめ直し、ケータイによってつながる新しい人間

関係と共存する道を探すことなのかもしれない。

〔参考文献〕

- (1) 『ボイス』、オフィシャル・ホームページ
<http://www.movies.co.jp/voice/index2.html>
- (2) 岡田朋之・松田美佐（編）『ケータイ学入門——メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』、有斐閣選書、二〇〇二
- (3) 郵政省『平成一一年版 通信白書』、一九九九
- (4) 総務省『平成一五年版 情報通信白書』、二〇〇三
- (5) ジェームズ・E・カッツ、マーク・オークス（著）、立川敬二（監修）、富田英典（監訳）『絶え間なき交信の時代——ケータイ文化の誕生』、NTT出版、二〇〇三

